

善者に親近すれば 霧露の中に行くが如く  
衣を湿さずといえども時々潤いあり

人は一人では生きていけないと良く言われます。これは私たちの生活が、一人ひとりまったく独立して生きているのではなく、たくさんの人との係わり合いの中で成り立っているという事を示しています。

人と人が出会い、係わり合いを持つということは、お互いに影響を与え合うこと、と言えるかもしれません。人と人との出会いの中には、それまでの人生観が一変してしまうような、劇的な出会いもあるかもしれません。

しかしその一方で、自分はそれと気づかなくても、言葉やしぐさなどから少しずつ影響を受けていることもあります。それはまるで、霧や目に見えないような細かい雨の中を歩いていくと、いつのまにか衣服がしっとり濡れてしまう、そのようなことに似ています。

私たちの日常生活において大切なことは、自らが他に惑わされることなく、正しい判断ができることだと思います。その判断力を身につけることが肝要です。

道元禅師は、冒頭の句の中で、私たちが優れた指導者やよい友達に接し、正しい教えを行じていくことよって、その衣服がよりよい霧で湿っていくように、知らないうちによい影響を受けていくとお示しになっているのです。

表題の言葉は、曹洞宗の開祖・道元禪師どうげんぜんじのお示しを、弟子の懷英禪師えいようぜんじが記録された『正法眼蔵随聞記』しほうほうげんぞうずいもんきの中に出てくる言葉です。原典は中国唐代の『僞山警衆』ぎさんけいしゆにあります。

優れた指導者に学び、良い友達をもって共に努力することによって、一人では成し得ないことが、だんだんと自分にもやればできるといって自身につながら、積極的にやろうとする心が生まれてくるものです。

人間は念け心を持っていきますから、やらなければならぬこととをきつい断念してしまいがちです。だからこそ、優れた指導者や良い友達に近づきなさい、と表題の言葉は教えているのです。そうすれば、知らず知らずのうちに目標に向かって進んでいく自分を発見することでしょう。

善者と親近すは

霧霧路の中に行くが

如く

衣も湿らすと雖ども

時々に潤い有り

正法眼蔵随聞記

曹洞宗

神奈川県第二宗務所  
第五教区 布教部・出版部